

20th Anniversary of IRAQ WAR

イラク戦争20年を振り返る上映会とシンポジウム

- 日時 3月18日（土）14：00～20：00（開場13:30）
- 会場 専修大学 神田キャンパス 10号館10041教室 & オンライン（ZOOM）
- 主催 イラク戦争の検証を求めるネットワーク
お問い合わせ info@iraqwarinquiry.net <https://www.iraqwarinquiry.net/>
- 共催 アースウォーカーズ、市民社会フォーラム、あけび書房
- 賛同 一般社団法人コスタリカ社会科学研究所/日本国際ボランティアセンター
ピースポート/許すな！改憲・市民連絡会

【開催趣旨】

～戦争を終わらせるために、戦争を始めないために～

イラク戦争は、今の世界や日本に大きな影響をもたらしています。

国連安保理の常任理事国アメリカが、国連憲章違反の戦争を強行したというイラク戦争の構図は、現在のロシアによるウクライナ侵攻と同じ構図なのです。

もし、国際社会がイラク戦争を真摯に検証し、その反省から具体的な取り組みを始めていたら、ロシアのウクライナ侵攻を止められたかもしれません。

また、イラク戦争後の日本は安全保障政策で大きく変貌しました。

「台湾有事」を口実に日米の軍事的な一体化がさらに進み、軍事費倍増が狙われていることを考える上でも、イラク戦争を今一度振り返る必要があると私たちは考えています。

【タイムテーブル】

■上映■

- 14:00~15:50 『リトルバーズ -イラク戦火の家族たち』
15:50~16:05 + 監督アフタートーク
16:10~17:50 『ファルージャ イラク戦争日本人質事件…そして』
休憩

■シンポジウム■

- 18:00 「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」事務局長挨拶
18:10 セッション1 「イラク戦争20年を振り返る」
19:00 セッション2 「イラク戦争後の日本」
司会：志葉玲（イラク戦争の検証を求めるネットワーク事務局長）
小野万里子（セイブ・イラクチルドレン・名古屋代表）
綿井健陽（映画監督）
布施祐仁（ジャーナリスト）
相澤恭行（Chal Chal）
佐藤真紀（国際協力アドバイザー）
高遠菜穂子（イラクエイドワーカー）
20:00 閉会 ※延長あり

【登壇者プロフィール】

綿井健陽（映画監督）

綿井健陽（わたい・たけはる）ジャーナリスト・映画監督。1971年生まれ、大阪府出身。アジアプレス・インターナショナル所属。イラク戦争報道で、2003年度「ボーン・上田賞」特別賞、「ギャラクシー賞」報道活動部門、「JCJ（日本ジャーナリスト会議）」大賞などを受賞。監督作に「Little Birds -イラク戦火の家族たち-」（05）「311」（12／森達也、安岡卓治、松林要樹と共同）

「イラク チグリスに浮かぶ平和」(14) など。22年から23年にかけて、ウクライナ戦争を取材。

布施祐仁 (ジャーナリスト)

ジャーナリスト

1976年、東京都生まれ。『ルポ イチエフ 福島第一原発レベル7の現場』で平和・協同ジャーナリスト基金賞、JCJ賞を受賞。三浦英之氏との共著『日報隠蔽 南スーダンで自衛隊は何を見たのか』で石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞を受賞。著書に『日米密約 裁かれない米兵犯罪』『経済的徴兵制』、共著に『主権なき平和国家 地位協定の国際比較からみる日本の姿』などがある。

小野万里子 (セイブ・イラクチルドレン・名古屋代表)

愛知県弁護士会所属弁護士。2003.2から『セイブイラクチルドレン名古屋』を結成してイラクへの医療支援活動を始める。2020.3まで50名以上のイラク人医療者を研修に招聘し、支援と交流を図ってきた。2022.10イラクのモスルとバスラを訪問し、2023.6に医師研修も再開予定。

相澤恭行 (Chal Chal)

シンガーソングライター「YATCH」。2003年イラクで平和活動「人間の盾」に参加し現地で戦争を体験。後にNPO設立しイラク人アーティスト招聘など文化交流事業を続ける。中東の歌を日本語でも歌うバンド「ChalChal」のリーダー。高校非常勤講師 (アラビア語)

<https://yatch-aizawa.jimdofree.com/>

佐藤真紀 (国際協力アドバイザー)

1994年よりイエメン、シリア、パレスチナで国際協力の仕事にかかわる。2002

年にイラクを訪問し、小児がん支援のNGO日本イラク医療支援ネットワークを立ち上げた。現在は赤ベコ職人として、Team Bekoを立ち上げ、シリア地震緊急支援を行っている。またYatchの主宰するChalChalに参加しデジタル紙芝居の制作を担当する。多摩大学非常勤講師。

http://teambeko.html.xdomain.jp/team_beko/index.html

高遠菜穂子（イラクエイドワーカー）

1970年、北海道生まれ。大学卒業後、会社員を経て地元で飲食店経営に携わる。2000年インドの「マザーテレサの家」、2001年からタイ、カンボジアのエイズホスピスでボランティア活動に専念。2003年5月からイラクでの活動開始。主に病院や避難民への緊急支援、医療支援などを行う。2004年4月にイラク・ファルージャで「自衛隊の撤退」を要求する現地武装勢力に拘束された。解放後、日本国内で「自己責任」バッシングを受ける。現在もイラク人道・医療支援活動を継続中。2019年より難民・国内避難民を多数受け入れているクルド自治区ドホークで教育支援に特化した「ピースセルフプロジェクト」を設立。2022年、一般社団法人ピースセルフプロジェクト代表理事に就任。「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」呼びかけ人、「海外派遣自衛官と家族の健康を考える会」共同代表、「九条の会」世話人。

志葉玲（イラク戦争の検証を求めるネットワーク事務局長）

ジャーナリスト。1975年東京出身。イラクやパレスチナ、ウクライナなどの紛争地での現地取材の他、脱原発・自然エネルギー取材、入管による在日外国人への人権侵害等、様々なテーマを取材・執筆する。週刊誌や新聞、通信社などに寄稿、テレビ局に映像を提供。Yahoo! ニュース個人のオーサー（オフィシャルライター）。イラク戦争の検証を求めるネットワーク事務局長。著書に『ウクライナ危機から問う日本と世界の平和 戦場ジャーナリストの提言』（あけび書房）、『難民鎖国ニッポン』、『13歳からの環境問題』（かがわ出版）、『たたかう! ジャーナリスト宣言』（社会批評社）、共編著に『イラク戦争を知らない君たちへ』（あけび書房）、『原発依存国家』（扶桑社新書）など。

www.reishiva.com

希望の木 イラク医療支援20年

— 上 —

向き合う「日本式」実践

イラク南部バスラの子ど

も特別病院(約百床)の病
床で、ウサギ柄のパジャマ
を着たシャリーフアちゃん
(三)はこの日も抗がん剤治
療を受けていた。足首に点
滴の管が二本。口を真一文
字に結び、眉間にしわを寄
せていた。

「ご飯は食べた?」。女
性医師ワサン・ハミドさん
(四)がベッドの横にかが
み、つらさをほぐすように
話しかけるが、わずかに視
線を動かすだけ。ハミドさ
んは「笑顔になつたら家に
帰れるよ」と小さな肩をそ



10月上旬、イラク南部バスラの病院で、患者毎に
寄り添う医師ハミドさん(中央)と話す小野さん

と抱いた。
湾岸戦争(一九九一年)
とイラク戦争(二〇〇三
年)の激戦地だったバス
ラ。十万人あたりの小児が
ん罹率は一五・七四人
(二二年)で、日本など先
進国の十人程度を上回る。

「どうせ死んでしまつか
ら、患者と親しくすると自
検査体制は行き届かず、実
際はさらに高いとみられ
る。米英軍が使った劣化
ウラン弾による放射能汚
染が主な原因と指摘され
る。

分が傷ついただけ」。ハミド
さんが医師になってから、
先輩や同僚のそんな言葉を
何度も聞いてきた。しかし
九年前、白血病治療の研修
を受けた名古屋大病院(名
古屋市昭和区)で、医師や
看護師がチームとなり、時
間をかけて患者に向き合っ
姿を目にした。「これが
『命を救う』というこ」
だと知った。

バスラに戻ると「日本
式」を実践し、他の医師ら
に働き掛け、治療方針など
を話し合うようにした。子
どもに対しても説明を省か
ない。「こうした対応が患
者の心を支え、治療結果を
大きく左右する」との信念
が刻まれた。

なり二十年近く続けてい
る。理事長で弁護士の小野
万里子さん(六)がイラク戦
争開戦前夜の〇三年二月、
反戦を目的とした市民団体
の現地調査団に参加したこ
とがきっかけだった。
視察中、バグダッドやバ
スラの病院で、ベッドに力
なく横たわる多くの小児が
んの子どもたちを目の当た
りにした。病院を一周する
うちに亡くなる子もいた。
医薬品や設備、経験ある医
師の不足は明らかだった。
帰国後すぐに団体を設立。
これまで来日した医師五十
一人は今も全員が医療の第
一線に立つ。
バスラ子ども特別病院の
病棟の廊下に描かれた「希
望の木」。小児がんで治療
を受け、退院した子どもた
ちの笑顔が並ぶ。
十月初旬、バスラを十三
年ぶりに訪れた小野さん
に、日本で研修を受けた小
児科医フサム・サーレハ
さん(五)は「結婚して親に
なった子もいます」と報告
した。目を潤ませた小野さ
んは、二十年近く前に病院
のベッドで力尽きていた子
どもを思い出していた。
「この笑顔の写真が、闘病
中の親子をどれだけ励まし
ているか」。そうやって壁
に張られた子どもたちの写
真を、いとおしそうにカメ
ラに収めた。

戦争や戦闘で荒廃したイ
ラクの医療支援を続けるN
PO法人「セイブ・イラク
チルドレン・名古屋」。理
事長の小野さんの現地視察
に同行し、日本で学んだ医
師らの姿を追った。
(イラク南部バスラで、蜘蛛
手美鶴、写真も)



10月初旬、イラク南部バスラの子ども特別病院で、がんを克服した子どもたちの写真が張られた「希望の木」

命を救う幹となれ

希望の木 イラク医療支援20年

十月初旬、NPO法人

小野さんは二〇〇三年か

「セイブ・イラクチルドレン・名古屋」(名古屋市東

ら、度重なる戦争や、過激

区)理事長の小野万里子さ

派組織「イスラム国」(I

ん(六)が、黄色のスーツケ

S)支配の後遺症に苦しむ

ースを引いて、イラク南部

イラクの子どもたちへの

バスラの空港に降り立つ

医療支援を続ける。物資を

た。イラク訪問は八年ぶ

送り、名古屋市などの病院

り、バスラへは十三年ぶり

と連携し、小児医療などを

の再訪。新型コロナウイル

専門とするイラク人医師

ス禍で二年以上途絶えてい

計五十一人を日本に招い

る、イラク人医師への研修

た。

事業を再開させるための視

日本研修を受けた医師

察だ。

数人が働くバスラ子ども特

別病院。病棟の壁には「希

望の木」が描かれていた。

太い幹から上下左右に枝が

伸び、退院した小児がん患

者の写真が張られている。

恥ずかしそうな女の子、満

面の笑みの男の子。

「がんを克服した子ども

がこんなに増えた。あなた

たちが支えてくれたおかげ

です」。自身も日本で研修

を受けた小児科医フサーム

・サーレハさん(五)の言葉

に、小野さんの目から涙が

あふれた。

(イラク南部バスラで、蜘

手美鶴、写真も)

24面へ続く

希望の木 イラク医療支援20年

—中—

骨髄移植 ついに実現へ

「十八年かかり、ようやく夢がかないそうです」

イラク南部バスラの医師アサード・カラフさん(五十)は、NPO法人「セイブ・イラクチルドレン・名古屋」理事長の小野万里子さん(六)に、二〇〇四年の来日時と同じ、控えめな笑顔で語った。同NPOの支援を受けて日本で研修を受けた第一号。来年三月、バスラにがん治療専門病院が開設、イラクで骨髄移植ができる病院をつくるという「夢」が実現する。

現在、イラクにはドナーから骨髄移植を受けられる病院がない。移植が必要な患者は、トルコやレバノン、インドに渡航するしかない。バスラ子ども特別病院の集中治療室(ICU)

- ㊦10月、「夢がかないそうです」と話すアサード・カラフさん
- ㊦10月上旬、子ども病院で、抗がん剤治療を受けぐったりとする女兒
＝イラク南部バスラで



では、トルコ・イスタンブールで骨髄移植手術を受けたハサン君(五)が、高熱に



苦しんでいた。隣室では、海外での手術後に拒否反応を起こした八カ月の男児がぐったりしていた。「イラクに移植可能な施設ができれば、患者の負担が減り、医師の技術向上にもつながる」とカラフさんは期待する。



バスラでは湾岸(一九九一年)とイラク(二〇〇三年)の二度の戦争後、がん患者が急増。しかし、カラフさんによると「バスラには〇四年当時、血液病専門医は私人だけだった」。白血病と診断された子どもはほとんどは、生きる道を閉ざされた。当時、カラフさんらとともに来日し、名古屋大病院(名古屋市中昭和区)で治療を受けた六歳の男児も一時は回復したが、帰国後四カ月で亡くなった。

「日本の医療をイラクへ持ち帰る」。多くの救えぬ命に向き合ってきたカラフさんは、強い思いで一年間、小児白血病の治療を学んだ。指導した名大の小島勢二名誉教授(セシ)は、真面目でひた向き、修行僧のような姿が忘れられない。「イラクでは助からない症状の子が、日本で助かる姿を彼は見た。(専門病院開設という)目標を日本で見つけ、それをついに実現させた」と喜ぶ。

新しい病院はイラク南部全域からがん患者を引き受ける予定だ。病院開設には、骨髄移植の統括責任者を務めるカラフさんのほかにも、日本で研修を受けた医師たちが尽力した。〇五年に愛知医科大病院(愛知県長久手市)で研修を受けた医師アツバス・アルタミ(ミさん)は、バスラ県保健局長として新病院の開設事業を推進してきた。十月初旬、小野さんと再会したアルタミさんは「新病院の医師の研修も含めて協力を」と切り出した。カラフさんも「若い医師たちの先生役となる医師が必要。日本での研修を再開してほしい」と続けた。かつて子どもの白血病は日本でも治療が難しいとされたが、現在は完全治癒が望める病気となった。近い将来、バスラでも。小野さんもそう信じ、次世代のイラク人医師の受け入れ準備を進めている。

(イラク南部バスラで、蜘蛛手美鶴、写真も)



イラク北部モスルにあるアルハンサ病院の敷地内で、六階建ての建物が廃墟と化していた。爆発や、銃弾の痕が残る。「完成したばかりの小児科棟が、一度も使われないまま戦いで破壊された」。医師パッサム・アルアッパシさん(左)がいまいましげに建物を見上げる。



10月上旬、過激派組織「イスラム国」(IS)に破壊されたアルハンサ病院の小児科棟。10月、生まれたてのめいを抱く女性。24時間で30件超の出産があり、いつも混み合っている。いずれもイラク北部モスルで



(イラク北部モスルで、蜘蛛美鶴、写真も)

希望の木 イラク医療支援20年

—下

治療現場に戦闘の爪痕

が、医療機関の復興は遅れ、手術用の手袋や消毒液など基本的な医療用品すら足りていない。病院に在庫もなく「患者が手術用の糸を用意せざるを得ない」ともある。アルアッパシさんの顔に苦渋が浮かんだ。

イラクの人口増加率は毎年3%を超え、モスルでも産婦人科は休む暇がない。分娩室や新生児集中治療室は、病院敷地内にあるコンテナトレーラーの中にある。狭いコンテナ内で月千数百件の普通分娩と、四百件以上の帝王切開手術が行われ、患者と医療関係者で常にこった返す。

小児外科医パッサム・アルハジャールさん(左)は「ここが病院に見える？」と自嘲気味だ。小児外科の患者も多く、一日に十件近い手術をこなす日もあるという。

十月初旬、NPO法人「セイブ・イラクチルドレン・名古屋」理事長の小野万里子さん(左)はモスルを訪れ、アルハジャールさんと日本で研修を受けた医師たちと再会を果たした。

一四年からのIS占領中、一部の医師たちは「患者が私たちを必要としてい」と街にとどまり、戦闘の続く中で医療を続けた。アルハジャールさんがインターネット上に「麻酔が足りな

りない」と書き込むと、小野さんはいともたつてもいられず、薬の購入資金をかさ集めてモスル近くまで駆けつけたことを振り返った。

今回の訪問ではうれしいニュースもあった。一七年に来日した心臓超音波検査(心エコー)の女性専門医シェイマ・アブドルハーディさん(左)が、女性向けの心エコー診察所を開いた。

イラクなど保守的なアラブ諸国では、女性患者や家族が男性医師によるエコー検査を拒否し、病気の発見が遅れるケースが少なくない。「女性が検査を受けやすい環境をつくりたい」。アブドルハーディさんは日本での研修中、指導医らに決意を語っていた。

診療所は、女性患者の心理的負担を軽くするために検査用の完全な個室を備え、エコー画像を見せながら患者に説明する。「や」と女性の医師に出会えた」と喜ばれる。アブドルハーディさんが診療所でさっそうと働く姿に、小野さんは目を細めた。「二十年の支援は、確実に実を結んでいた。できることを、これからも続けていこうと確認できた」

名古屋で来月
NPO報告会



NPO法人「セイブ・イラクチルドレン・名古屋」(名古屋市中区)は12月4日、理事長の小野万里子さんによる

イラク現状報告会を、愛知県保険医協会・伏見会議室(名古屋市中区)で開く。参加費無料。オンラインでも参加できる。小野さんに同行した一般社団法人「ピースセルプロジェクト」代表理事の高遠菜穂子さんも現地の様子を伝え

る。高遠さんはイラク北部ドホークを拠点に、子どもたちの教育支援や国内避難民支援を続けている。午前10時から正午まで。QRコードや電話で事前の申し込みが必要。問い合わせは、事務局=電070(5263)2883=へ。